

香林

香林山 無量寺
機関紙 第1号
発行者 堤俊海
編集者 堤俊翁

彼岸

「彼岸」とはインドの古いことばである、パーラミーター

(波羅密多)を訳したもので、「向こう岸に到る」という意味です。

むこう岸は仏の世界であり、真実の世界を表わしています。

この岸は、現在私達が生きている世界です。

この岸とむこう岸の間には、河があります。

河にはとうとうと水が流れていて、水は煩惱(迷い)という

大きな力で、渡るうとする人々を押し流しています。私達が、

明かるく(仏)、正しく(法)、和やかな(僧)、真実の世界

(彼岸)を望んでいながらつい煩惱という強い水流に押し流されて、

この迷いの世界(此岸)から一步も抜け出すことができずにいる

のが現実です。

満ち足りて出来ないものの無いような今日、おかげ様で、有難く、

勿体ない今日である筈なのに、ともかく何事につけても、感謝する

気持ちで薄れている今日、お彼岸の意味をよく噛みしめて生きたい

ものです。

「供養」 つてなにに?

「先祖供養」・「追善供養」といった言葉がすぐに思い浮かぶ事でしょう。

「供養」という言葉は多様な意味に用いられていますが、本来は仏教の最も

尊い真実の宝である、「三宝」即ち仏、法、僧、または父母、師長、亡き人に

対して、体(身)、言葉(口)、心(意)の三方法によってさまざまな供物

をささげ、敬い礼拝することをいいます。

「供養」即ち「敬う、たたえる、拝する」という意味があります。

ですから、供養は敬いと感謝の心がおのずと形にあらわれた行為であり、

なんらかの見返りを期待してするものではないのです。

まず、第一にこの供養の心をしっかりとおさえていただきたいものです。

現在、「先祖供養」は盛んに行なわれています。私達一人一人が今この世に

人として生をうけているのは、無数ともいえる先祖があつてこそその事です。

永遠の命の流れの中で生かされている自分に気づき、そうした永遠の命に

頭を下げ、感謝の念をいただくのが「先祖供養」です。

「先祖供養」は故人の年回忌法要ばかりではありません。彼岸会、盂蘭盆会

施餓鬼会といった仏事も「先祖供養」と申せましょう。

こうした「先祖供養」をてがかりとして「三宝供養」をしていく事が仏事の

根本といえましょう。

二一〇五

「仏」は仏陀を略した言葉で目覚めた者、悟れる人、阿弥陀如来

「法」は真実の教え、仏の悟りの内容、説かれた教えの数々

「僧」は僧伽(さんが)の略語、仏の説く法によって導かれ、自らも

仏になろうと努力している人々の集団の事です。

三宝に帰依することは仏教徒の基本となっています。

平成六年行事予定

- 一月 一日 修正会
- 一月 二十五日 宗祖御忌会 (ぎよき)
久留米門中寺院随喜
- 三月 二十一日 春彼岸会法要
- 七月 十五日 大施餓鬼会法要
久留米門中寺院随喜
- 八月 十三日より十五日まで 盂蘭盆会
- 九月 二十三日 秋彼岸会法要
- 十一月 二十三日 十夜法要

平成六年法事年回表

- 一周忌 平成五年に亡くなられた方
- 三回忌 平成四年に亡くなられた方
- 七回忌 昭和六十三年
- 十三回忌 昭和五十七年
- 十七回忌 昭和五十三年
- 二十五回忌 昭和四十五年
- 三十三回忌 昭和三十七年
- 五十回忌 昭和二十二年

詳細は寺本堂に掲示致しております。

無量皇王寺縁起

香林山 冷智院 無量皇王寺

(こうりんざん れいちいん むりょうじ)

所属宗派 浄土宗 鎮西派 総本山京都知恩院

宗祖 法然上人(ほうねんしょうにん)

無量寺開山 寛永三年 来慈高哲上人

市内田町にて開基

四代貞誓上人の頃、現在地に移転

本尊 阿彌陀如来十一立像

昭和二十五年 国の重要文化財に指定

観音堂 聖観世立五百蓮菩薩

筑後西国三十三万所の十八番札所

おのづから、こころただしくなりにけり

よきえにしにて寺をめぐれば

十四日△△へのおきそい

毎月十四日午後七時より本堂にて

念仏とお経の練習などをしていきます。

どなたでも参加いただけます。

あわただしい毎日の中で自分を見つめなおし

心の垢を落としてみませんか。

お願い

法事の申し込みは、早めにお願ひします。

特に日曜日、祝祭日はこみますので